

学校法人 仙台育英学園 秀光中学校

二〇二五年度 入学者選考試験問題（教科型）

国語

（第一問～第四問）

注意

- ・試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。
- ・この問題冊子は、十四ページあります。
- ・答えはすべて問題の指示にしたがって、解答用紙に記入しなさい。

第一問 次の問いに答えなさい。

問一 次の——線の読みをひらがなで書きなさい。

- ① 彼女は尊敬できる人だ。
- ② 点呼をとって出欠を確認する。
- ③ 北国の冬は寒さが厳しい。

問二 次の——線のカタカナを漢字になおしなさい。

- ① 風邪をひいた弟の坎ビョウをする。
- ② 子ねこをアズかる。
- ③ 将来はケイサツ官になりたい。

問三 次の——線は同音異義語です。カタカナを漢字になおしなさい。

- ① シンヨウ樹の幹はまっすぐのびる。
- ② 客からのシンヨウを得る。

問四 次は対義語になっています。□に当てはまる漢字を書きなさい。

- | | | | | |
|---|----|---|---|---|
| ① | 縮小 | ↓ | □ | 大 |
| ② | 簡単 | ↑ | □ | 雑 |

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

霜村 典は中学校に入学し、図書委員会で同学年の瀬尾幹（美声の持ち主でピアノも演奏するが、その声を同級生にからかわれたことから目立つことを極端に避けている）、鯨井夏野、寺佐々矢と知り合った。夏休みの図書室当番で打ち解けた四人は、夏休み自由課題のグループ研究として、バンドを組んで演奏した曲を提出することにした。典が作詞し、それぞれのパートで演奏して曲は完成し、夏休みが終わった。

「おはよー、典」

一年一組の靴箱の前でも友だち数人が立ち話中で、声をかけられた。「おはよ」と返しながら持ってきた上履きに足を入れ、かがんで自分の靴をしまう。

「宿題多すぎじゃなかった？ 自由課題が面倒でさあ」

「わかる。テキストに絵描いて終わらせた」

相づちを打ったほうの友だちが、俺の頭上から話しかけてくる。「典は？ 作文にするって言ってたよな」

「あー……そのつもりだったけど、変えた」

「え、何にしたの」

「グループ研究」

「まじ？ 誰とだよ」

「なんのテーマで？」

つぎつぎに質問が飛んできたけど、いったいどこから話せばいいのか困ってしまった。うまく説明できる気がしない。

だからここでくわしく話すのはやめにして、「先に教室行ってるよ」とだけ答えた。

旧校舎の二階へ向かう。

階段の踊り場^{おど}でくると方向を換えようとしたら、後ろから誰かが駆け足で近づいてきて、「わっ！」という低い声とともに目の前に手のひらがかざされた。

「佐々矢」

顔を確かめなくなってたってわかる。

手を引っこめて隣に並んだ佐々矢は、「典、おはよ」と悪びれずに笑った。背負っているのは俺のと同じような黒いリュックサックで、それがあの赤いギターケースじゃないのがなんだかふしぎな感じがする。

当番表の **A** 注 ってフルネームではなく、 **B** って

とりあえずの呼び方でもなく、 **C** と当たり前に呼んでいることが、もしかしたらいちばんのふしぎかもしれない。

「なあ、持ってきた？」

何を、というところまで言われなくてもきかなくても、ちゃんと通じてしまうもの。

俺は右腕^{うで}を背中^{うで}に回してリュックサックの底をたたき、「もちろん」と答えた。

この中に、俺たちのグループ研究が入っている。

五教科の宿題のほうが分量は格段に多いのに、それらを終わらせた達成感よりずっと、USBメモリと三枚のレポート用紙がここにあることのほうがうれしかった。

「お。ナイスタイミング」

頭ひとつ分背の高い佐々矢が廊下^{ろうか}の先を見て言ったので、俺もそっちに目を向けた。教室へと向かったり、立ち止まって話しこんでいたりする生徒たちのすきまから、よく知る顔がちらりと見えた。あ、幹。

気づいてもらいたくて、俺は手をあげて呼ぼうとした。でも、その瞬間^{しんかん}だった。

「あ、ミキちゃん、久しぶりー！」

「今日もかわいいねーっ」

前に行く女子たちが、すれ違いざまに幹に声をかけた。それまでの会話とちっとも変わらない、おかしくてたまらないってテンションで、きゃはははって笑いを爆発^{ばくはつ}させながら。ほんとに明るく、笑いながら。

幹の目は俺と佐々矢をとらえていた。こっちに手をふり返そうとして、腕をわずかにあげてくれてもいた。でもその表情が、またたく間にこわばって①いくのがわかった。長い廊下^{ちゅうとはんば}の中途半端な場所で、それまで歩いていた足をぱたりと止めて。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

俺と佐々矢は急いでそばに近づいた。

視界の端^{はし}で確かめたかぎりでは、女子たちは二組の教室に入っていたと思う。もしかして今のが、歌声をからかったという例のクラスメイト？

それを直接^{たす}尋ねていいのか一瞬迷^{ごしよ}ったとき、

「……僕、グループ研究、ぬける」

幹がつぶやいたことの意味が、すぐには理解できなかった。ふたつの目は足もとに向けられていた。^②黒い線のような汚^{よご}れがところどころに走る、くすんだ色の床^{ゆか}。それをじっと見つめながら。

「ごめん、……やっぱり、目立^Iつようなことしたくない。調子に乗ってたみたい。みんなに誘^{さそ}ってもらえて、それがうれしくて」

佐々矢が「おい、幹」とあわてて割りこむ。

「んなこと言うなよ、せっかく完成させた曲じゃん。あんなの気にすんな」

「気にするよ!」

幹ががばっと顔を上げた。

D、に近い声だった。

ゆれる目が佐々矢を映して、ぱっと俺に向けられる。まばたきを忘れたみたいな強さで、まっすぐ。

視線をもろに受け止めてしまっとうろたえる。こんな感情的な口調で、目つきで、幹が主張するなんてこれまで一度もなかった。初めて耳にする譲^{ゆず}れない意見が、よりによってグ

ループ研究をやめたい話？

嘘^{うそ}だろ。

なんで？ どうして、そんな。

「ほんとにごめんね。レポートから、僕の名前消しておいて……」

それだけつけ足すと、目の前の身体^{からだ}がするっと動き出した。佐々矢がさらに何か声をかけた。でも幹はふり返ることも、足を止めることもなく、あっという間にはなれていった。一歩ずつ遠くなつて、やがて廊下の角に消える。

朝の会まであと五分、急げとチャイムが告^つげている。まるで耳のすぐ後ろで鳴ってるみたいに、やかましく、つつけんどんに。

(中略)

「もっ、もしもし？ 幹？」

マイクに向かって話しかける。スピーカーからは、サーッという細かなノイズしか聞こえない。

だけど、かすかに気配を感じた。気配としか言いようのない何かを。

たしかに今、電波の先に相手がいること。俺の声が届^{とど}いてるらしいこと。

ちゃんとつながってる。

俺たち、まだつながってるんだ。

「あの、しゃべりたくなかったら、このままでいいから。」

ちょっとだけ聞いて」

たのんでみたら、やっぱり返事はないけど、通話を切られるわけでもなかった。それをOKって意味だと思いこむことにして、続ける。

「グループ研究の曲を録音したとき、『一番と二番の歌詞がバラバラだ』って話になって、それで幹が『二番をなしにしよう』って提案してくれたでしょ。あのとき、なんか俺、急に心臓のあたりがちくつとしたんだ。……ちくつとていうか、ぴりっとなんていうか、……とにかく感じたんだけど、何なのかわかんなかった」

一方的にしゃべればしゃべるほど、本来伝えたいことからどんどんズレていってる気がして、めっちゃくちゃ不安になってくる。

だとしてもまた口を開く。

「でも、今はわかる。……あのとき幹は『今回は、やめよう』って言うてくれた。『今回は』って。それ聞いて俺、もしかして次回があるのかなって、思った」

あのとき通り過ぎた一瞬の痛みの正体は、期待。

これで終わりじゃないかもっていう、勝手な望み。願いと。

グループ研究を提出できさえすれば、それでおしまいだったはずなのに。やり残したことが生まれて、次はもっとこう

したいって、考え出したら止まらなくなって。このままじゃ、笑顔で手をふってさよならなんてできないよ。

場所も理由も失ったなら、今度は自分たちでつくりたい。

「話は変わるけど。俺、今日誕生日でさ」

Ⅲ「……え？」

ほんのかすかにだけど、声が出た。

聞きまちがえようのない幹の声が。たぶん、っていうか絶対、動揺してる。困ってる表情がはっきり思い浮かんだ。

その顔を見たい。こんな距離のあるじれったい方法じゃなく、もっと近くで。

「ささやの、えっと、グループ名としての笹屋ね。これで四人全員、誕生日が来たわけだけど。動画を投こうするチャンネルって十三歳からつくれるんだって」

こんな話を急に聞かされている幹の戸惑いが伝わってくるたび、ふっと笑い出したくなる。なのに自分の声は意に反してガタガタになっていく。

かっこわるい。全然ごまかせない。

でも電話の向こうにいるのは、友だちだ。……だからきつと、ごまかさなくていいんだ。

「あの二番の歌詞に、もっかいチャンスをくれないかな。みんなで録音して、撮影もして、あ、もちろん顔は出さなくていいよ。そうやってネットに上げてみない？」

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

続けたい。もう一度、始めたい。ああでもないこうでもないって、試行錯誤さくごのごちゃごちゃの中に幹もいてほしい。いてくれなきゃ嫌だいや。

ピアノ弾ひいて、歌って。

いっしょにやろうよ。

「だめ？」

スマホをぎゅっとにぎりしめながら返事を待った。これが祈いのるって気持ちなのかと思った。^④本気で伝えたいことが、どういう形であれ相手に届いたのなら、これ以上できることはない。

たぶん後悔こうかいすることになるだろう。もっと違うことばが選べたんじゃないか、違うやり方があったんじゃないかって。たやすく悪いほうへ転がる想像も、ありのまま受け止めるだけ。

だけどころして話せた。そのことだけは……。

部屋の真ん中でいつの間にかうつむいて、スマホを持つ右腕を左腕できつくつかんでいた。自分で自分を支えながら、どうにか立っていた。

通話にがさっとノイズが起こる。え、何？ なんの音？

耳に当てたスピーカーから、小さく息を吸うのが聞こえた気がした。ちょうど歌い出す瞬間みたいに。

^⑤止まっていた空気が動き出す。

Ⅳ「典くん、……お誕生日、おめでとう」

(眞島めいり「夏のカルテット」)
(問題の都合により本文の一部を変更しています。)

注 当番表……図書委員会の図書室当番表のこと。

問一

□ A～Cに当てはまる語として最もふさわしいものを次のア～ウから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 佐々矢 イ 寺くん ウ 寺佐々矢

問二

——線①「こわばっていく」について「こわばる」の意味としてふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

こわばる

- | | |
|---|-----------------|
| ア | つらく泣きそうな感じになる |
| イ | 冷静でしんけんな感じになる |
| ウ | 不きげんで不満そうな感じになる |
| エ | かたく張りつめた感じになる |

問三

——線②「黒い線のような汚れがところどころに走る、くすんだ色の床。それをじっと見つめながら」とありますが、このときの「幹」の気持ちを説明したものとしてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 床をじっと見つめながら、学校での日常とはこういうものだったと改めて思い出し失望している。
- イ 学校でからかわれることがいやで、二度とこのような思いをしないようにしようと考えている。
- ウ 夏休みの体験は特別なことで、普段の学校生活に同じようなことは期待できないと思っている。
- エ からかわれたことに加えて掃除の行き届いていない床を見て、ますます不愉快な気持ちになっている。

問四

D に入る言葉として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア つぶやいた
- イ さげんだ
- ウ ささやいた
- エ ののしった

問五

——線③「急に心臓のあたりがちくちくとした」のはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 「一番と二番の歌詞がバラバラだ」と指摘されて、作詞を引き受けたことを後悔したから。
- イ 「二番をなしにしよう」と言われて、作詞した立場としてショックを受けたから。
- ウ 「今回は、やめよう」と言われて、「次回」があるかもしれないと期待したから。
- エ 四人のグループ研究での曲作りが、これで終わりになるのかと残念に思ったから。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

問六 —— 線④「本気で伝えたいこと」とありますが、

「典」が「幹」に伝えたいことの内容が書かれている部分を六文でぬき出し、最後の一文を書きぬきなさい。

問七 —— 線⑤「止まっていた空気が動き出す」という表

現について述べたものとして最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア もう一度四人で演奏しようという典の申し出に、幹の心が動き出していることが感じられる。

イ 典が誕生日を迎えたことを聞いて、お祝いの言葉だけは伝えようとする幹の気持ちを感じられる。

ウ 典の提案を受けて、幹が部屋の中を歩き回りながら考えている様子が感じられる。

エ 部屋の中に一瞬風が吹き込んで、よどんでいた空気がきれいになった様子が感じられる。

問八 —— 線Ⅰ～Ⅳの「幹」について、その言動の理由を

述べたものとしてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幹が「目立つようなことしたくない」と言ったのは、クラスメイトに声をからかわれるのがいやだから。

イ 幹が「あっという間にはなれていった」のは、朝の会が始まるチャイムが鳴り、急がなければと思ったから。

ウ 幹が「……え?」と言ったのは、典がそれまでの話題と関係のない自分の誕生日の話を持ちだしたのでおどろいたから。

エ 幹が「典くん、……お誕生日、おめでとう」と言ったのは、また四人で活動したいという気持ちが大きくなったから。

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

先日、私は電車のなかで、若い女性が大学生風の若者に突然^{げん}つき飛ばされて床^{ゆか}にたたきつけられるというショッキングな「事件」を目撃^{もくげき}しました。座席の端^{はし}にすわっていた若者のメール作業を、かたわらに後ろ向きで立っていた女性のかばんが邪魔^{じゃま}したことが原因のようでした。床から起きあがった女性はものすごい表情で「犯人」をにらみつけていました。私がショックを受けたのは、その間二人の間に、ひとことの言葉も交^かわされなかったことです。若者が「ちょっとかばんが……」と一言声をかければ、「あら、ごめんなさい」ですむことです。また突然つき飛ばされた女性が、一言の抗議^{こうぎ}の言葉も発しないというのも、考えてみればきわめて不自然で異様なことです。私もふくめ見ていた周囲からも、若者をたしなめる言葉もなく一件落着というわけです。無意識のうちに関わり合いを避け「観客」に徹^{てつ}した私自身へのいらだちもあり、^①実に不愉快^{ふかい}な「事件」でした。

人間は言葉により他とのコミュニケーションをはかり、社会生活を営んでいます。言葉により自分の考えを伝え、言葉により他を理解することを基本として社会が成り立っています。言葉による主張や説得^{はうき}を放棄^{ほうき}することは、暴力につながります。「うるさい、だまれ」と言ってしまうと、あとは暴力しかありません。その最大・最悪のケースが戦争だと言え

るでしょう。

言葉は、思考の道具であり、言葉なしには、学問も文化も成り立ちません。日本の古代人は「言霊信仰^{ことだましんじょう}」といって、言葉には靈魂^{れいこん}が宿っていると考え、言葉を信仰の対象にしたということです。言葉の持つ大きな力をよく知っていたからでしょう。

最近、子どもや若者の言葉の力が落ちてきているのではないかという声をよく耳にします。子どもや若者がすぐに「キレ」たり「ムカツ」いたりするのも、このことと無関係ではないのかもしれませんが。

^②人が生きていくうえでとても重要な言葉の力を、人はどのように獲得^{かくとく}していくのでしょうか。基本的には、家族・地域の人たち・友達・年長者など周囲の人たちとのコミュニケーションのなかで言葉を身につけていきます。学校は意図的・計画的に言葉の力を伸ばすシステムとも言えます。

しかし、言葉を獲得するうえで最も効果的な方法は読書です。幼いとき何十回も同じ絵本を読んでもらったり、字が読めるようになるとワクワク、ドキドキしながら物語を楽しんだり、未知の世界にふれて感動したり……そういう本との出会いのなかで、人は知らず知らずのうちに言葉を身につけていきます。言葉が豊かになれば、思考が深まり、内面も豊かになります。

最近、核家族化や少子化が進み、また地域との関係がうす

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

れていくなかで、コミュニケーションを通しての言葉の獲得が難しくなっています。そういう意味で、読書の大切さがますます大きくなっているといえます。また、世の中のIT化が進めば進むほど、言葉の世界や読書的重要性が増すという主張も近年数多くなされています。

A、バリー・サンダースという思想史の専門家は『本が死ぬところ暴力が生まれる』（杉本卓訳、新曜社）という本を書いて、言葉や物語の世界の復権を説いています。また、ジェーン・ハリーは大脳生理学や神経言語学の立場から『滅びゆく思考力』（西村辨作・新美明夫編訳、大修館書店）『よみがえれ思考力』（西村辨作訳、大修館書店）などの著作で、ハイテクの時代になればなるほど読み書き能力が重要であると主張し、教育のあり方に警鐘を鳴らしています。

インターネットの時代に読書は時代おくれだと考えている人がいるかも知れませんが、ITの時代こそ逆に読書が重要なのです。若い人の大好きなケイタイのメールだって、言葉の力が絶対に必要です。インターネットで情報を読み解くためにも、パソコンにテキストを打ちこむためにも、言葉の力がものをいうはずですよ。

若い人たちには本の世界に遊ぶ楽しみを知り、その楽しみを通して、大いに言葉の力をきたえてほしいと思います。本を読むことの意義や効用を挙げればきりがありませんが、若い人たちが言葉を豊かにするという点だけでも読書の大切さを理解して、読書に親しんでほしいと願っています。

ふと手にした小さな詩集、『のはらうたⅣ』（工藤直子作、童話屋）の巻末にこんな詩がのっていました。

I ひかりとやみ

ふくろうげんぞう

みあげれば

よぞらの ほしが

まつりのように まぶしい

ああ

ひかるためには

くらやみも ひつようだ

たった六行、文字にして四〇字ばかりの短い詩ですが、この詩を読んだ人は、まっ暗闇くらやみのなかにキラキラとかがやく満天の星空をくっきりとイメージすることができるでしょう。静まりかえった星明かりの夜の雰囲気ふんいきを感じたり、人によっては、いつかどこかで見た星空を思い浮かべるかもしれません。「キラキラ」とか「満天の」とか、私がいま思わず使ってしまった手あかのついた言葉は、この詩には一切使われていません。簡潔な言葉で「ひかりとやみ」をみごとに對比させ、読む者の想像力を刺激しげきし、深く強い印象を残します。

B、この詩の情景をテレビ画面につくりあげるとし

たらどうなるでしょう。優秀なディレクターとカメラマンなら、あるいは美しい映像をつくることに成功するかもしれません。多分バックに静かな音楽を流し、詩の一行一行を画面に流しこんでいくでしょう。でも、その映像を観た人は、この詩を文字で読んだときに体験したような、自分なりのイメージづくりがどこまでできるでしょうか。多くの人が映像に見とれて、「きれいだな」というだけで終わってしまうのではないのでしょうか。だから活字メディアが映像メディアよりすぐれているなどというつもりはありません。映像には映像としてのよさと強さがあります。だいたい文字で伝えることで書かれた詩を映像化すること自体が無理な話です。いくらハイテク化やIT化が進んでも、活字でしか伝わらないもの、活字のほうがよりよく伝わるものが、たくさんあるのだということです。

テレビやコンピュータ・ゲームなどは、映像と音声によって、直接的・感覚的に情報を伝えてきます。C、本は活字という一種の記号が印刷されているだけで、本を読むということは、その活字を一字一字たどりながらその意味を考え、という作業を必要とします。テレビで流される星空の映像は、直接私たちの感覚を刺激するので、ストレートに受け取ることができます。

でも、「よぞらの ほしが まつりのように まぶしい」という詩を読むとき、私たちは頭のなかでいろんなことを考

えます。「よ」「ぞ」「ら」という文字の一つ一つにはなんの意味ありませんが、「よぞら」とまとまった時、「夜空」となって一定のイメージが結ばれ、はじめて意味を持ちます。一字一字が意味を持たない活字という記号の連続を眼で追うことで、私たちはうれしくなったり、悲しくなったりします。それは、無意識のうちに頭のなかで活字という記号を変換する作業を行っているからです。

本を読むということは、本の字面を追うことではなく、頭をフル回転させて活字のつながりが意味することを読み取ることです。「行間を読む」という言葉がありますが、そこに書かれていないものまで想像力を発揮して読み取ってしまうということでしょう。読書を楽しむためには、想像力を発揮することが必要です。また、読書は想像力をきたえるうえで大きな力をもっています。想像力は、思考力や創造力にもつながります。本を楽しむことを通して大いに創造力をきたえたいものです。

(笠原良郎「読書するということ」)

(問題の都合により本文の一部を変更しています。)

注 警鐘を鳴らす……危険だと注意をうながす。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

問一

——線①「実に不愉快な『事件』でした」とありますが、筆者が「不愉快」だと述べているのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 電車の中という公共の場でトラブルを起こした若者と女性を軽蔑^{けいべつ}したから。

イ 女性に対して抗議することもなくいきなり暴力をふるった若者を許せなかったから。

ウ 若者も女性も筆者もふくめて誰も言葉^{だれ}を発さずコミュニケーションを取らなかったから。

エ 暴力をふるわれたにも関わらず誰にも助けてもらえなかった女性がかawaiiそうだったから。

問二

——線②「人が生きていくうえでとても重要な言葉の力」とありますが、「言葉の力」が「重要」なのはなぜですか。その理由としてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は言葉によって他とコミュニケーションをとる、社会生活を送っているから。

イ 言葉は思考の道具であり、言葉によって学問や文化が成り立っているから。

ウ 学校で意図的・計画的に身につけなければいけない力だとされているから。

問三

エ 言葉が豊かになれば思考が深まって、内面も豊かな人になれるから。

□ A～Cに当てはまる語として最もふさわしいものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア つまり イ ところで ウ たとえば
エ しかし

問四

Ⅰ の詩について、筆者がこの詩を引用したのはどのようなことを伝えたかったからですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 音声で詩の内容を表現しようとしても、朗読者の読み方によって聞いている人の印象に差が出るということ。

イ ハイテク化やIT化が進んでも、活字でしか伝わらないものや活字のほうが伝わるものがたくさんあるということ。

ウ 映像を作ってしまうとイメージが固定されておもしろくなくなってしまうので、活字を使うほうがよいということ。

エ テレビやゲームは私たちの感覚を直接的に刺激してつかれてしまうので、本に親しんでほしいということ。

問五

~~~~線「手あかのついた言葉」とはどういう意味ですか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア すでに多く使われていて新しさがない言葉。
- イ 単純すぎて想像力がかき立てられない言葉。
- ウ 誰でも思いつく子どもが習うような言葉。
- エ 日常的によく使われているような言葉。

問六

——線③「活字という記号を変換する作業」にはどのような力が必要だと筆者は述べていますか。漢字三字で書きぬきなさい。

問七

——線「本を読むことの意義や効用」としてふさわしくないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉を豊かにする
- イ 想像力をきたえる
- ウ 思考力を高める
- エ 文化を創造する

第四問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

入学シーズンである四月初旬<sup>しよじゅん</sup>は近年、関東では桜の開花期が過ぎていることが多かった。今年は東京などで開花<sup>おく</sup>が遅れ、いまが花盛り<sup>はなざか</sup>。地域によっては来週、「桜と入学式」のシーンが多くみられるかもしれない。毎日小学生新聞に掲載された作家の辻村深月<sup>つじむらみづき</sup>さんのインタビューは、新学年を迎え<sup>むか</sup>た子どもたちへのエール<sup>①</sup>のように思えた。

『かがみの孤城<sup>こじょう</sup>』などで知られる辻村さんは小中高生のファンも多く、同紙にエッセー『『あなたの言葉』を』を連載中だ。書籍<sup>しよせき</sup>として出版されたのを I に、小中学生の質問に答えた。辻村さんのメッセージは「子どものころの気持ちは、なるべく覚えておいてください」今の気持ちを大切にする。こと。エッセーによると辻村さん自身は子どものころ、気持ちを口に出せなくても書き留めていた。「子どもの時間と大人の時間はつながっている」と辻村さん。子どもと大人の時代は別人のように捉え<sup>とら</sup>えられがちだ。だが、「大人はびっくりするくらい、子どもの自分の延長<sup>②</sup>」だという指摘<sup>してき</sup>にした。『かがみの孤城』の主人公は、学校に行かなくなつた少女だ。子どもたちも、昨今は自己表現を求められることが多い。それは大切だが、発言できなくても気持ちや言葉が大事にするようにと辻村さんは励ま<sup>はげ</sup>ましているように感じた。

大人はどうか。同じ場所に咲く桜も毎年、見る気持ちはさ

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

③ まざまだ。けれども確かに、過去の自分とつながっている。  
桜前線は、人々の思いを乗せて北上している。

(毎日新聞「余録」二〇二四年四月六日掲載)  
(問題の都合により本文の一部を変更しています。)

## 問二

I に入る語として最もふさわしいものを次の  
ア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 気  
イ 機  
ウ 希  
エ 記

## 問三

——線②「はっとした」とありますが、「はっとする」と同じような意味を持つ慣用句として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 足をすくう  
イ ひざを打つ  
ウ 手にあまる  
エ 鼻にかける

## 問四

——線③「桜前線は、人々の思いを乗せて北上している」とありますが、この一文に用いられている表現のくふうとして最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 強調  
イ 反復法  
ウ 擬人法  
エ 問いかけ

## 問一

——線①「エール」の意味としてふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 応援  
イ 非難  
ウ 注意  
エ 満足

問五

——線「それは大切だが、発言できなくても気持ちや言葉を大事にする」について、次の問いに答えなさい。

(1)「それ」が指しているものを本文中から書きぬきなさい。

(2) あなたのクラスではあるテーマについて話し合っています。その話し合いで意見を求められています。あなたは人前で自分の意見を発表することをためらっています。そこで「発言できなくても気持ちや言葉を大事にする」という言葉を思い出しました。あなたはどうしますか。その理由も合わせて、書きなさい。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

